特集

「地域資源」としての「都市化遺産」
東京・世田谷の近現代史から

源川　真希
MINAGAWA, Masaki
（首都大学東京 オープンユニバーシティ 准教授）

はじめに

本稿は「地域資源」としての「都市化遺産」の「発見」というものを、新たな市民活動の一つの対象として位置づけていくための試論である。ここでいう「都市化遺産」は、近現代の都市がつくられ発展していく過程で生まれた何らかの痕跡を指す。それは具体的な建築物であるとは限らない。また、これまでもさまざまな機会に言及されてきたモノの再解釈である場合も多い。ここでは、「都市化遺産」をどのように構想するか、さらには世田谷区の都市化のパターンに即した「都市化遺産」の存在形態はどのようなものか、について提示する。今後の議論の素材となれば幸いである。

1．「都市化遺産」を構想する

1.1　歴史学と地域社会

一般に歴史学という学問が、地域社会と関わり社会貢献をしていく方法としては、文化財保護、博物館等での調査・研究と展示、自治体史編纂などの分野での活動や、市民講座などさまざまな社会教育活動があげられる。そもそも歴史を書くことは、共同の「記憶」をつくる作業でもある。そうした記憶の基盤となる共同性の場としては、国民国家があり、また地域社会や特定の関係を取り結んだ集団もある。近年、歴史学ではこうしたアイデンティティの構築それ自体が研究の対象とされてきた。とりわけ国民国家という単位での共同性の構築それ自体がはらんでいた問題性が指摘され[1)]、現在でも激しい論争点となっている。

現在の地域社会とその地域の歴史との関係については、社会学的視座からの分析が必要となるが[2)]、歴史学も、地域社会における共同の記憶のつくられ方自体を研究の対象としてきた。「史蹟」研究がそれである。地域に生きた人々や、それに関わる歴史を石碑などの形で残していく行為自体に研究者の関心が集まっている。羽賀祥二氏によれば、人々の共通の感情を組織し、形にしたものが史蹟記念碑である。それを媒介にして、さらに周囲の人々に歴史的な感情と感覚を共有するように促す。記念碑は、なんらかの契機によって結びついた集団（共同体）が共有化しなければならない歴史的感情のシンボルであり、その記念碑の周辺を保護しようという心的な機制をつくり出していくという。このような視点から、史蹟記念碑、名勝碑、頌徳碑、土地開発碑、戦争記念碑などさまざまな碑の持つ

意味が考察されている[3)]。

1.2　近現代の地域社会と「記憶」

各自治体で取り組まれている自治体史編纂は、地域社会の歴史を学問的な方法に基づいて調査・分析し、地域の文化を後世に残していくと同時に、市民に向けて発信する営みである。各自治体の自治体史編纂の状況をみても、近現代史は独立した部会として扱われ、第二次世界大戦後、高度経済成長期まではもちろん、現在に近い時代まで記述が及んでいるのが普通である。また各自治体に置かれた歴史系博物館でも、少なくとも高度経済成長時代までの社会・生活に関わる展示がなされるようになっている。これらは近現代の地域社会の記憶をつくることになる。こうした記憶は、地域社会のアイデンティティ形成につながっていくのである。

他方、近現代の記憶に関わって最近注目されているのが、「近代化遺産」である。2007（平成19）年には経済産業省に産業遺産活用委員会が設置され、産業の近代化に貢献した「近代化産業遺産」について、地域史、産業史を軸としたストーリーを「近代化産業遺産群33」としてとりまとめている。この「近代化産業遺産」を、地域活性化に役立たせようというのが主旨である[4)]。

こうした「近代化遺産」をまちづくりに生かしていく動きは以前からみられるが、その一つとして滋賀県彦根市の「スミス記念（礼拝）堂」（アメリカ人牧師で彦根高等商業学校英語教師であったＰ・Ａ・スミスに、地元の大工が協力して建設。1931<昭和6>年竣工）の保存と活用を通じた、市民本位の新たなまちづくりの運動がある。この保存運動に関わっている歴史研究者である筒井正夫氏によれば、地域住民が身近に存在する近代化遺産の成立事情・社会的背景を学ぶなかで、近代化の功罪や地域的特性への認識を深め、それを基礎に、地についたまちづくりを展望することにもつながるという。また単に地域おこしのための観光資源という意味にとどまることなく、地域住民が自らの歩みを検証していく素材となると述べている[5)]。「近代化遺産」はナショナルレベル、地域レベルの記憶の構築に関わっているが、特に地域レベルでの住民の主体的な活動として「近代化遺産」を活用していることが重要であろう。

1.3　都市化と歴史遺産

地域の歴史遺産は、地域に「ある」ものではなく、歴史研究者と地域住民が共同して価値づけることによって歴史遺産に「なる」ものであると、奥村弘氏は述べる。まさに地域の歴史遺産は主体的につくられるものであり、それが市民社会の基礎を形づくるのである[6)]。本稿で考察の対象としたものは、以上と同じ意味合いをもっている。つまり急激な都市化と開発に翻弄されるなかで、下から都市づくりを行ってきた地域の歴史を掘り起こし、「都市再生」のもとでさらに大きく変化を遂げようする都市を市民が主体的に再考するこ

とに役立てる試みである。これは決して、「都市再生」政策のもと展開される再開発のなかで消えてゆく街並みへのノスタルジーを喚起するものではない。そこに存在した都市化・近代化をめぐるさまざまな葛藤も含めて、掘り起こしていくものである。本稿では、直接的には「近代化遺産」にヒントを得ながら、「地域資源」としての「都市化遺産」について考えてみたい。都市化が進むなかで、古くから住む人々と新しい住民との出会いがある。また人口が急激に増加するなかでのインフラ整備も必要となる。そのような都市化の痕跡がうかがえる建造物等を意味づけていく作業を、ここでのテーマとする。

いわゆる「近代化遺産」は、多くの場合、産業革命後に日本の工業化を担った設備に関するモニュメントが中心となる。あるいは、東京でいえば近代化のシンボルである都心の建築物などもその対象となるであろう。では工業化という形というよりも、住宅地化という形で都市化が進行した地域社会の「記憶」は、どのように発掘できるのであろうか。これが本稿で考えてみたい論点である。後に述べるが、人々が移り住み、農村地帯から住宅地にかわっていくことが表現されている建築物、あるいは碑、さらには刻まれた記録一般である。特に本稿では、東京旧市域の外側（世田谷区域を含む）が急激に都市化していく時代、つまり関東大震災から昭和初期を経て、第二次世界大戦後と高度経済成長開始期あたりにスポットをあてる。いわば現代都市の骨格ができあがる時代である。次に世田谷が都市化を開始した関東大震災とそれからの復興の時代を中心に、都市化と地域社会のようす、そこでの人々の反応を概観してみよう。

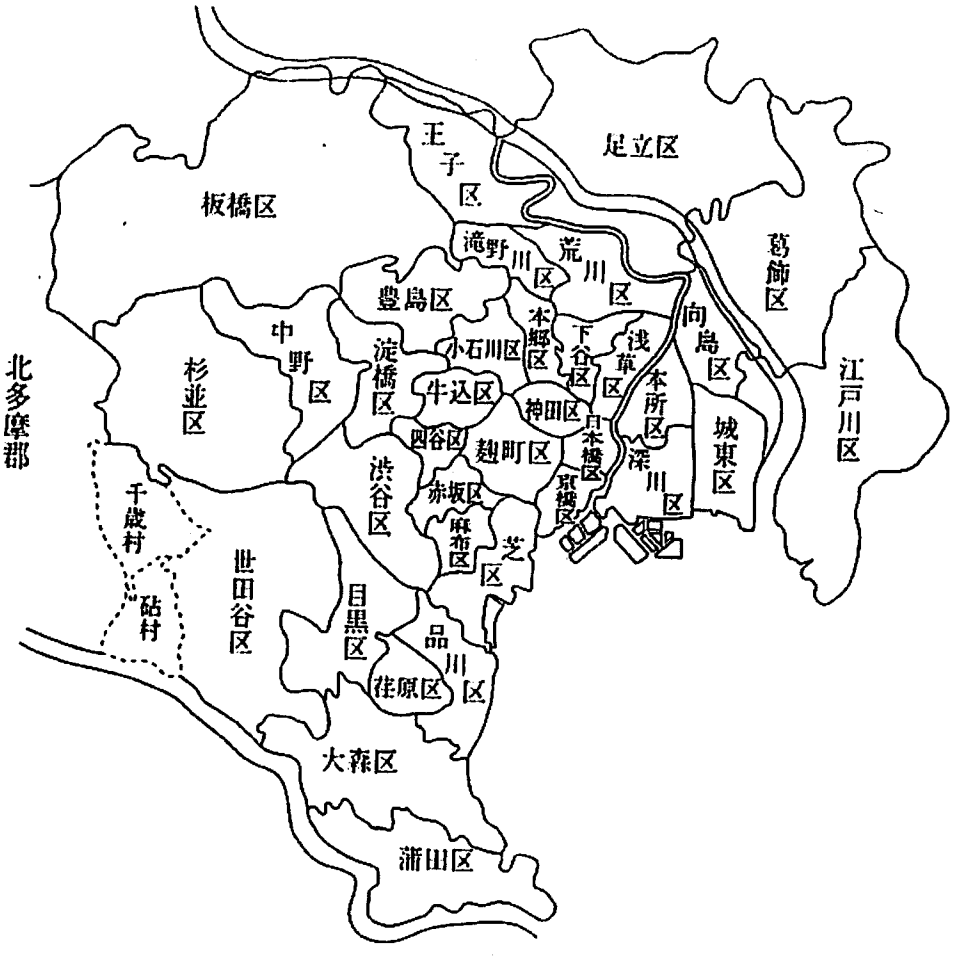
2．「大東京」誕生と世田谷

2.1　東京の発展と世田谷

まず東京の形成過程を概観しよう。明治維新後、江戸から東京への移行により東京府が誕生する。当初、神奈川県に属していた三多摩（北多摩、南多摩、西多摩の 3 郡）が東京府に編入されるのは 1893（明治 26）年のことである。その間、1889 年東京市が誕生した。最初は 15 区からなるが、1932（昭和 7）年に世田谷区域となる世田ヶ谷町、駒沢町、松澤村、玉川村を含む荏原郡をはじめ 5 郡が市域に編入された。「大東京」の誕生である。この時誕生した世田谷区は北多摩郡砧村、千歳村を含まなかった。これらの村は、1936 年に編入され現在の区域ができる（図 1 を参照）。

世田谷区域にはすでに 1907 年に玉川電車の渋谷・二子玉川が開通していた。当初は砂利を多摩川から運搬する目的であったが、乗客、貨物運搬も視野に入れて事業が開始された。玉川電車は都心から多摩川に遊びに行く観光客を運ぶ手段ともなっていった。こうして明治末期には、世田谷の郊外化が進んだ。その他世田谷区域には、大正期に駒沢ゴルフ場（当時の駒沢村　現駒沢公園のあたり）、松沢病院（松沢村）がつくられていった。徳冨蘆花（健次郎、徳富蘇峰の弟で小説家）がトルストイに感化を受け、農村生活を求め北多摩郡千歳村粕谷に移り住んだのは 1907 年 2 月であった。蘆花が移住した頃、東京市内から粕谷

図1　「大東京」



出典：源川『東京市政』、99頁。

までは徒歩か乗合馬車で移動した。彼は粕谷の地域共同体の仲間入りをしたが、明治末期のこのあたりは畑作と養蚕を中心とする農村地帯であった[7]。

世田谷区域の都市化の波について説明しよう。東京市内の人口は1920（大正9）年頃、200万を超えたところで停滞し、かわって周辺5郡に人口増がみられはじめたが、震災がそうした傾向を一層促進した。特に荏原郡全域と、豊多摩郡の一部の町における人口増が顕著であった。1920年から震災をはさんで1930年の10年間で、荏原郡全体は5倍以上の人口増をみせた。なかでも荏原町は15倍以上の増加を示していた。また豊多摩郡においても、淀橋町、渋谷町などはすでに都市化が進んでいることもあって全体として伸びは2,3倍程度だが、中央線沿線の杉並町は14倍以上という人口増をみた。東京市内からの流出、地方から東京市周辺への移動などによるものであった。世田谷区域も、世田ヶ谷町で5.6倍、松沢村で4.2倍、駒沢町で3.5倍の増加があった。他方、関東大震災後において、千歳村粕谷は、蔬菜生産に重きをおく都市近郊農村となり、蘆花は「東京が文化が大胯に歩い

て来ました」と述べていたが、まだまだ農村地帯の性格は変わらなかった。

2.2　世田谷の市街地化の始まり

1930年、震災復興事業が一応終了した。そのころ旧市域外側のどの町村においても、急激にふくれあがる人口に対応するための都市施設の設置が遅れていた。15倍の人口増をみた荏原町では急増する児童の数に小学校の施設が追いつかず、二部教授を実施せざるをえなかった。世田谷の場合も、この時期、世田ヶ谷町、駒沢町で二部教授が行われている[8]。また生活基盤も十分整備されていなかった。これらの整備は各々の町村財政を圧迫したので、町村側は市域に編入されることを求めた。都心に通い都心の施設を利用するサラリーマンのかなりの部分が、東京市周辺の郡部に住んでいたのであり、また震災により市内から出て行った富裕層が住むのが郡部であった。東京市と周辺5郡はさまざまな意味で一体のものとなっていた。こうして1932年10月1日、5郡82ヶ町村が20の区となって東京市に編入された。「大東京」の誕生である[9]。ちょうどこの時期、六大都市は例外なく市域の拡張を行っていた。また東京の震災復興事業にみられるように、現代にもつながる都市基盤の整備が達成された。震災復興事業が行われたわけではない大阪市でも、御堂筋の整備と道頓堀川にかかる橋梁の整備がこの時期に行われている。おそらく1920-30年代は前提条件を異にしながらも、各々の大都市が現代都市としての骨格を造り上げる時期だったのである。

さて世田谷区域は、区となる前後の時期から、世田ヶ谷町東北部・東南部、烏山川の南側一帯、豪徳寺周辺、駒沢町東半部と深沢4丁目、玉川村東部、砧村の成城学園駅周辺などで市街地化が進行していた[10]。すでに震災の前から、世田谷区域でも住宅地化を念頭に置いた区画整理が行われていた。例えば世田ヶ谷町の大場信續は農業土木工学を修め、地元での農業指導にも携わったが、第一次世界大戦後頃から、次第に進行する都市化への対応を考えざるをえなくなった。大場は玉川電気鉄道世田谷線誘致に尽力し、ついで荏原郡第一土地区画整理組合を立ち上げ、世田谷線沿線で宅地整備を進めていった。1927年の小田急線開通により下北沢、代田などでは人口が急増する。世田谷線沿線における宅地化の進行はもう少し遅れるとはいえ、その後の住宅都市としての展開に大きく寄与した事業であった[11]。またのちに述べる玉川全円耕地整理も有名である。

住宅地化の進度は地域によって偏差があるが、世田谷区域を含めて新市域に属する町村は、総じて昭和初期にかけて急激な都市化の進行による地域社会の変貌がみられた。これらの地域では、旧来から住む人々と新しく流入して居を構えた人との出会いがあっただろう。それも蘆花が明治末期に粕谷に居を構えた時のように、農村共同体に一人、また一人と新しく仲間入りしていくというのではなく、旧来の住民の数を大幅に圧倒する人々が押し寄せてきた、ということなのである。次章では、世田谷の事例のみを直接の対象とするわけではないが、都市化のなかでの地域社会の変化と、そこでの人々の活動や意識をさぐ

るため、「大東京」成立期に行われた名勝の選定を取り上げよう。

3．「新東京八名勝」選定と地域社会

3.1 「新東京八名勝」選定

ここで扱うのは「新東京八名勝」選定と、これをめぐる地域社会の反応である。「新東京八名勝」は、報知新聞社が 1932（昭和 7）年 10 月 1 日の市域拡張と新聞刊行 20,000 号を記念して実施したもので、「大東京」に編入される郡部に存在する神社仏閣・公園・河川などから投票によって「八名勝」を選ぶという企画であった[12]。すでに 1927 年 4 月から 5 月にかけて、東京日日新聞社、大阪毎日新聞社が主催し、鉄道省の後援のもとで「日本新八景」の選定が行われていた。これは日本全国の山岳・渓谷・瀑布・温泉・湖沼・河川・海岸・平原の八景から、おのおの代表的なものを一つ選ぶものであった。一般のはがき投票の結果に基づき、審査委員会が選定するというものである。投票総数 9,350 万、推薦された風景地は 1,470、最終的には「日本新八景・二十五名勝・百景」が選定されたのである[13]。

「新東京八名勝」は、こうしたイベントと同様の性格をもつ企画であった。選定は、1932 年 8 月 11 日から 9 月 10 日の約 1 ヶ月の間、あらかじめあげられた候補地に官製はがきで投票するという形で実施された。新聞社の主催であるという点も「日本新八景」と類似している。「新東京八名勝」の候補地選定委員は、飯沼一省（内務省都市計画課長）、藤沼庄平（警視総監）、大島辰次郎（内務省衛生局長）、下村壽一（文部省宗教局長）、香坂昌康（東京府知事）、永田秀次郎（東京市長）の他、田村剛（林学・造園学者）、井下清（東京市公園課長）など造園学・公園行政の専門家、鳥居龍蔵（人類学者）、三好学（植物学者）といった人々があたっていた。彼らは、当時いろいろな形で都市計画や都市の整備に携わった人士であるといってよい。

候補地となった神社仏閣、公園などが存在する地元では、対策本部にあたる「入選期成同盟会」などの組織がつくられ、青年団・従業員組合・在郷軍人会・信徒団体などがフルに動員されて投票を組織した。対策本部では謄写版、ゴム印などの道具が準備されて、ひたすらはがき印刷が行われた。かたや地元の人々や観光客などに、はがきを渡して記入してもらう運動が行われた。候補地の地元では、はがきを買い集めるため資金が必要となるが、地元民の寄付が募られ、あるいは候補地付近に駅を持つ鉄道会社などがバックアップしていたもようである。

主催者である報知新聞は、連日のように各候補地の得票数を報道して競争を煽った。最終的な投票総数は 890 万以上で、締め切り数日前の中央郵便局は、年賀状事務以来の多忙であったという[14]。新しく誕生する東京市の人口が約 500 万人である。そこからも、この選定をめぐる地域同士の競争が、いかに白熱化したものであるかがわかるであろう。9 月 23 日には投票の結果が確定し、「八名勝」と「十六景」が決定した（表を参照）。後者

の「十六景」は、選定を開始した当初にはなかったものであるが、選定委員によって後からつくられたのである。なお世田谷区域からは、「世田谷豪徳寺」、「瀬田玉川の丘」、「奥沢の九品仏」（浄真寺）が名勝候補地とされ、このうち「奥沢の九品仏」が「十六景」に選ばれていた。

表　「新東京八名勝」と「新東京十六景」

新東京八名勝	市域編入後の区名
池上本門寺	大森区
西新井大師	足立区
北品川　天王社	品川区
日暮里　諏訪神社	荒川区
赤塚の松月院	板橋区
目黒の祐天寺	目黒区
洗足池	大森区
亀戸天神	城東区

新東京十六景	市域編入後の区名
雑司ヶ谷　鬼子母神の森	豊島区
大井の大仏	品川区
水元の水郷	葛飾区
奥沢の九品仏	世田谷区
新井薬師	中野区
柴又帝釈天	葛飾区
目黒不動	目黒区
篠崎堤の桜	江戸川区
堀切の花菖蒲	葛飾区
善養寺の松	江戸川区
哲学堂	中野区
三宝寺池	板橋区
大宮八幡	杉並区
滝野川の渓流	滝野川区
丸子多摩川の丘	大森区
豊島園	板橋区

出典：『報知新聞』1932年9月23日

3.2 「八名勝」と地域社会

「八名勝」に選ばれた場所には、報知新聞社により東京市長永田秀次郎の名前が入った石碑が建てられ、得票数と順位が刻まれた。例えば北豊島日暮里町（荒川区となる）の諏訪神社は、旧市域の下谷区谷中から抜けて西日暮里駅方面に向かったところの高台にある。また亀戸天神は、南葛飾郡亀戸町（城東区となる）にある。同町は旧市域の本所区に接し鐘淵紡績、東洋モスリンなど大規模な工場が多く集まる地帯であり、昭和初期には「市街戦」を伴う大争議も行われた労働者の町であった。さらに荏原郡品川町（品川区となる）の天王社（品川神社）は、第一京浜沿いにある。これら三つの場所では現在においても八名勝選定の碑をみることができるし、浄真寺総門の脇に十六景選定の碑を確認できる（図2）。

図2

「新東京名勝　選外十六景
奥澤　九品仏」と書かれている。
（以下、写真はすべて筆者撮影）

これらは、地域社会の類型は異なるものの、いずれも東京市に接しており、急激な人口流入をみた場所も多い。「八名勝」選定の投票の動員の中心となったのは、旧来の有力者層や各種団体であるが、集められたはがきの山は「郷土愛」の結晶であると選定委員の下村壽一は述べた。「八名勝」選定のため地域ぐるみで投票を組織することは、おのおのの

町村が「大東京」に編入されるなかで、まさに消えゆく町・村の共同の記憶を確保する行為であったといえよう[15]。

この「八名勝」選定とそのための「選挙活動」は、地元民にとっては、市域編入前の町村が地域アイデンティティを確認するための行為としての側面を持っている。ここでは名勝選定という側面だけではなく、東京市周辺地域の都市化を地元がどのように受けとめたか、ということを考えさせる材料、すなわち「都市化遺産」として、「八名勝」の碑を位置づけたい。もちろんこのようなイベントは数多くない。だがこのようなイベントを取り上げなくても、都市化の波に洗われ始めた震災後から昭和初期のこの時期に、人々はどのような反応をしたのかということを探ることはできる。いいかえれば「都市化遺産」を「発見」することは十分可能なのである。

4．「都市化遺産」の「発見」

4.1　身近に存在する都市化の痕跡

本稿で提起したいのは、都市が形成される時代の「遺産」を発見し、それにまつわる史実を解明するという行為である。おそらくこれらは、いわゆる「近代化遺産」ほど、はっきりとした形として残存し認識されるものではない。また多くの場合、人を呼び寄せる観光資源にはなりにくいので、町おこし的な意味での価値は少ないかも知れない。しかし私たちが生きる地域社会の成り立ち、急激な都市化に翻弄されるなかでの人々の生活と意識をさぐることができる材料ではないかと思われる。次にどのようなものが「都市化遺産」となりうるのかを示してみたい。「八名勝」選定という大がかりなイベントの事例ではなく、まずはもっと日常的なレベルで存在する遺物から、都市化への地元の反応がいかに表現されるかをさぐってみよう。

先に名勝に指定された碑について言及したが、地域社会のあちらこちらに存在する神社仏閣に残るさまざまなモニュメントからも、近代都市化の痕跡を探ることが可能である。そもそも神社仏閣には多くの碑が建てられている。古くから存在する寺社でも、近代に入ってから建造された碑が圧倒的に多いだろう。神社の場合、鳥居や境内地の周りを覆っている囲い（玉垣）、灯籠、その他の石造物を見てみると、実にいろいろな情報が得られる。また先の「新東京八名勝」選定のような記念碑の他、日露戦争の忠魂碑、顕彰碑、歌碑などがさまざま存在する。特に昭和初期のものとしては、一つは昭和天皇の即位の大典（1928〈昭和3〉年）記念に関わる情報が鳥居などに刻まれ、あるいは1940年の「紀元二六〇〇年」奉祝行事にあわせて、鳥居を立て直しあるいは記念碑をつくっている例をみつけることが多いだろう。

「大東京」に編入される荏原郡荏原町（荏原区となる）は、先にふれたとおり震災の前後に新市域のなかでもひときわ激しい人口増に見舞われた場所である。東急目黒線武蔵小山駅の近くにある三谷八幡神社の場合、1930-31年にかけて氏子により玉垣が整備されている

が、そこに氏子と思われる人の名前、商家の屋号などが刻まれている。おそらくこの時代に、周辺で商業を営んでいた人々だろう。すでに武蔵小山駅前の商店街も発展している時期であった。ここに刻まれているのは、地元の有力者と思われる人名の他、呉服商、銘木商、薪炭問屋、水菓子商、鳶職、洋品店といったものの屋号である。またこうした伝統的な商人層に加えて、なかにはタクシー会社、カフェーなどが存在する（図3、図4）。

図3

三谷八幡神社（現品川区）
水菓子商（果物商）の名前が見える。

図4

三谷八幡神社　カフェー喜多方。

もちろんこれらの経営者は旧来からの住民かも知れないが、伝統的な商業とは区別されるモダンなものである。こうしたモニュメントも、この地域の都市化、近代化の衝撃をうかがわせるものであり「都市化遺産」なのである。

4.2　世田谷の「都市化遺産」

さて世田谷の特性は、農村部からの急速な都市化＝住宅地としての発展がみられたという点である。従って、近代化の過程は工業化や物資の国内・国外的流通を主導した都市とは異なるし、都市化の過程は東京の都心区（旧市域）とは全く違っている。そこで都市化の「記憶」を「都市化遺産」として掘り起こしてみよう。

先に大場信纘による住宅地開発を紹介したが、農村から住宅都市への転換という意味で忘れられないのが、玉川全円耕地整理の事例である。これは関東大震災の直前から行われた。耕地整理は一般には農地整備として実施されるが、豊田正治村長は、当地の住宅地としての発展を見越した大規模な耕地整理を行ったのである。等々力にある玉川神社には、この豊田を顕彰する碑などが残っている。住宅地化のための耕地整理事業を進めるにあたっては、もちろん推進派と反対派の軋轢も存在する。形として残る碑だけではなく、そうした史実も含めて掘り起こしていくことは、世田谷の住宅地としての発展を考える上で意味のある作業に違いない。また玉川神社には高度経済成長期に行われた玉垣整備を記念した銘板が存在する。区内のいくつかの神社には、このような玉垣整備に関わるモニュメントが残されていることも指摘しておく。

ところで世田谷区では、1980年代に近代建築についての調査報告が行われており、現在も「財団法人世田谷トラストまちづくり」による近代建築の調査が続けられている。また街並み保存のための調査研究活動も活発に行われている。あわせて近代建築を保全していく作業が、世田谷区との連携のもとで進められている。こうした事業については先進的取り組みが行われてきた地域であるといってよい。その他、「近代化遺産」としての駒沢給水所配水塔（弦巻）の保存運動もあり、近代化・都市化の痕跡を保全していく活発な動きをみることができる。さらに「せたがや百景」は、現代の建築物や施設を含めており、ここからも都市化の跡をたどることができ、世田谷区風景づくり条例による「地域風景資産」選定の試みも注目される[16]。

このような実践を前に、あらためて付け加えることもないのであるが、先に述べたような都市化の痕跡という観点から考察してみよう。例えば、給水塔・配水塔はまさに人口の急激な増加と水の需要に対応するものであり、都市化を象徴するモニュメントなのである。これが建設されることになる背景をあわせて調査することで、関東大震災から「大東京」成立の頃における都市化のあり方を、具体的に知ることができるであろう。また戦後世田谷の風景として、しばしば紹介される廻沢のガスタンクは、1956年6月にこの場所に設置されたものである。東京郊外と隣接県の都市化に備えて、東京ガス豊洲工場－千住工場－滝野川整圧所－練馬整圧所（新設）－世田谷整圧所（新設）－鶴見工場を環状高圧導管でつなぐという試みの一環をなすものであった。世田谷に設置されたのは日本で初の球形高圧ガスホルダーで、貯蔵能力は当時世界最大であったといわれる[17]。こうした高度経済成長とさらなる都市化の時期に作られた建造物も重要である。さらには、都市イベントとしての東京オリンピックに関わるモニュメントも対象となる。また都市化によって引き起こされた交通問題・公害、あるいは災害などネガティブな記憶についても「都市化遺産」として意味づけを与えなければならない。視点を変えれば、世田谷が軍用地として利用されていく過程も、近代化、都市化という文脈で考えることもできるかも知れない。さらにそうした軍用地が、戦後における新たな都市化の進展のなかで変貌していくようすも含め

て理解する必要があるように思われる。

以上のような作業によって都市化、近代化の過程とそこで生じた問題、人々の葛藤などを認識し、後世に伝えることができるのではないだろうか。

おわりに

本稿で筆者が行ったささやかな問題提起は、都市化、近代化のなかでの地域社会の変貌を記録する何らかのモニュメントを「発見」することによって、当時の人々がどのように新しい事態に対応したかということに関する地域の歴史を掘り起こそうというものである。現在、世田谷区内で努力が重ねられている近代建築保全、街並み保存の実践に学びながら、少し違った観点から地域の記憶をたどっていく作業である。再開発によりさらに街並みが変化していく都市地域社会にとっては、文化財保護や「近代化遺産」の保存・活用などと並んで、こうした試みも重要な意味があるのではないか。もちろん、「都市化遺産」の「発見」と意味づけのためには地域の歴史の専門家の助言が不可欠である。そして区立郷土資料館、図書館などの機関における調査・研究、史料保存が、ますます重要な役割を果たすことはいうまでもない。

［注］

1）ナショナル・ヒストリーとしての歴史叙述自体の持つ問題性については、成田龍一『〈歴史〉はいかに語られるか』（NHK 出版、2001 年）など参照。

2）中筋直哉「地域が歴史を創り出す　歴史が地域を造り出す」（森岡清志編『地域の社会学』有斐閣、2008 年）。

3）羽賀祥二『史蹟論　19 世紀日本の地域社会と歴史意識』（名古屋大学出版会、1998 年）、6 頁。

さらに忠魂碑など戦争記念碑については、「慰霊」という問題設定から研究が進められている。

4）経済産業省ホームページ（http://www.meti.go.jp/press/20071130005/20071130005.html）。「近代化遺産」については、清水慶一「近代化遺産」（第 2 回　近代化遺産にはどのような種類があるか、第 3 回　近代化遺産の保存と活用）（『歴史と地理』第 617 号　2008 年 9 月、第 620 号　2008 年 12 月）など参照。

5）筒井正夫「地域史のなかの近代化遺産」（京都民科歴史部会『新しい歴史学のために』第 245 号、2002 年 2 月）、『新修　彦根市史』第 3 巻（彦根市、2009 年）。

保存運動の詳細な経緯については、筒井正夫「スミス記念堂の保存活用をめぐる市民運動とまちおこし」（文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議ＨＰ

http://www.bunkaisan.jp/articles/archives/2005/03/post_1.php）。

6）奥村弘「市民社会形成の基礎学としての歴史研究の今日的位置」（『歴史評論』第686号、2007年6月）。

奥村氏は歴史資料ネットワークの中心的担い手である。これは阪神淡路大震災後に行われた歴史資料保全活動から生まれたものである。1995（平成7）年1月の地震発生後、早くも2月から、関西の歴史関係学会を中心に被災した家屋から歴史資料を保全する活動が開始された。ボランティア活動を担う人々も被災している場合も多いなか、被災地の巡回調査が取り組まれた。さらには市民講座等を重ねて歴史遺産の保存活動を行った。その後も同団体は、市民と歴史学会による組織として活動を続け、1990年代後半から2000年代における大地震、大規模水害の発生にともなって各地に同様の動きが生まれるなか、資料救済活動の全国的なセンターとして機能している（奥村弘「大規模自然災害と地域歴史遺産保全」『歴史評論』第666号、2005年10月）。これは、歴史研究・史料保存の活動と地域社会が直接つながり、そもそも何が歴史資料であるのかということを考えるところから、市民と共同の学習が行われた事例である。

7）「読者に」（徳冨蘆花『みみずのたはごと』下、1938年、改版1977年）、139頁以下。

8）『荏原郡世田ヶ谷町現状調査』、『荏原郡駒沢町現状調査』（東京市市域拡張部、1931年）参照。

9）「大東京」成立の事情と政治史的意義等については、源川『東京市政』（日本経済評論社、2007年）の第5章を参照されたい。

10）『世田谷近・現代史』（世田谷区、1976年）、18頁。

11）鈴木勇一郎「近郊農村の都市化と宅地開発」（鈴木『近代日本の大都市形成』岩田書院、2004年）。

12）以下の叙述は、源川前掲『東京市政』第5章も参照。

13）荒山正彦「風景のローカリズム」（「郷土」研究会編『郷土　表象と実践』嵯峨野書院、2003年）。東京府内では高尾山と奥多摩渓谷が百景に入っている。

14）『報知新聞』1932年9月10日。

15）『報知新聞』1932年9月23日。

なお「八名勝」選定の意義については、選定委員のなかに次のような意見があった。まずは、自然美や史蹟を極力保護し市民の情操に潤いを与えるのは尊い文化的事業であり、これは「敬神崇仏」の思想の涵養にもつながるというもの。都市が膨張するにつれて、開発に伴って付近にある名勝地が破壊されていくが、これらを維持保存する制度がないとして、「八名勝」選定が名勝保存行政展開のきっかけとなるという位置づけを与えるもの。

さらに鉄道会社が名勝選定の選挙運動のバックアップをするということからうかがわれるように、観光地としての発展を目指した地元の思惑も存在する。選定委員の堀木新橋運輸事務所長も、鉄道を利用した小旅行が増えているなかで大衆に目的地を与え、国民保健・国民精神の点からもよいとする意見もみられた。以上のように「八名勝」選定をめぐっては、自然・景観保存と観光地開発、それに国民の保健・精神涵養など様々な思惑が存在したのである。

１６）1999年に制定された「世田谷区風景づくり条例」については、大西貢司「東京都世田谷区『風景づくり』の独自性　風景づくり条例、風景づくりフォーラムと国分寺崖線保全整備条例を中心に－」（『日本大学生産工学部研究報告Ｂ』2005年６月）を参照。

１７）『東京ガス百年史』（東京ガス株式会社、1986年）。